

幻の石狩ホテル



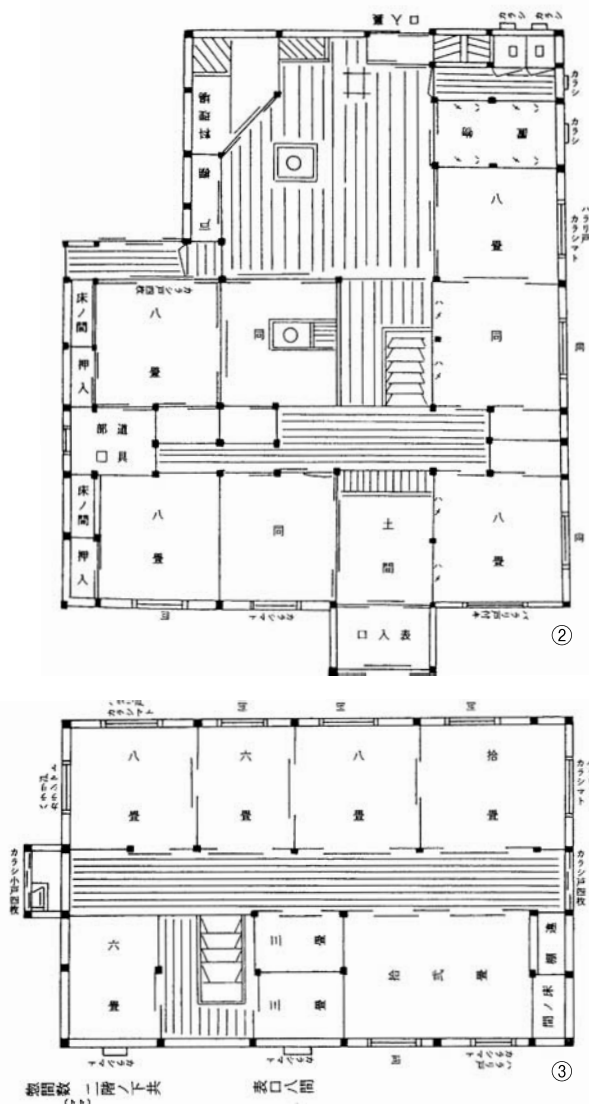
①

明治9（1876）年5月、石狩本町地区は大火に見舞われ、市街の大部分が焼失しました。その際、病院や教育所など多くの公的な建物が失われました。駅通所もそのひとつです。

駅通所とは、民間の経営する旅館や運送業者が少なかった時代に、開拓使や道庁が道内各地に設置したもので、宿泊施設と運送用の馬や人足の斡旋所が一体になった施設です。

石狩では、江戸時代に建てられた運上屋が使われていましたが、大火の後には、浜町にあったサケ漁の番屋のような建物を仮駅通所として使うこととなりました。しかし、この仮駅通所は、狭い、汚いと評判が悪く、外国人や役人は、個人の住宅に泊まっていました。

そのため、石狩の住民から、既存の建物を駅通所として買収したいので資金を融資してもらいたいとの要望が開拓使に上げられました。



■図1 幻の石狩ホテル

①外観図面、②1階平面図、③2階平面図

それが【図1】の建物です。間口8間（14.4m）、奥行9間（16.2m）の2階建て。8畳が9部屋、6畳が2部屋、10畳と12畳が二部屋ずつという大きな家でした。建っていた正確な位置は分かりませんが、弁天町にあつたようです。特徴的なのは、外壁が下見板張り、窓はすべて観音開きで、鋳戸がつくという洋風の外観です。もし、この建物が駅通所となっていたら、石狩で最初の洋風宿泊所、つまりホテルとなっていたことでしょう。札幌では明治8年ころから民間人も西洋風の建物を建てるようになったようですが、石狩にも立派な西洋風の建物があつたわけです。

残念ながら開拓使が、この建物の購入資金千円（現在の八千万円くらい）の融資に応じなかったため、石狩最初のホテルは幻に終わりました。

石狩にホテルが建設されるのは、石狩浜に「海浜ホテル」(写真)が建てられた約60年後のことでした。

(工藤義衛)



■海浜ホテル

※昭和20年空襲により消失

■文化財課・いしかり砂丘の風資料館

☎62-3711

✉bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp